

絵本を基盤とした教育の意義

The Significance of Education Based on Picture Books

前田 美樹 畑山 朗詠 前田 一明
Miki MAEDA Akie HATAYAMA Kazuaki MAEDA

青森中央短期大学幼児保育学科

Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

Key words ; 絵本、教育、保育、言葉、表現、芸術、身体性

1. はじめに

青森中央短期大学幼児保育学科では、令和6年度より認定絵本士の養成講座を開講する運びとなった。これに伴い、教育課程における新規開設科目を含めた6つの関連科目間の連携体制を整えることで、絵本による教育を重視した授業を展開する。

本稿は保育者養成における言語教育の重要性と、保育活動のみならず、保育者養成における絵本の活用の可能性について考察するものである。

2. 保育現場における言語活動の重要性

2. 1. 言語の身体性の喪失 ～身体性の再興に向けて～

人は皆、言葉によって連続的な事象を切り分け、その事象を認識する。言葉によって認識されないものは無いと言ってもよいかもしれない。このような意味で、「世界は言葉でできている」と言うことができる。人が世界に在るためには言葉が必要である。そして、人は生まれたその時から、言語獲得への道を歩み始める。

言葉とは本来、顔の表情や声色や話すスピードの変化、ジェスチャーなどを伴って発せられる身体的なものである。今井むつみ(2023, p.60)の言葉を借りると、言語とは「マルチモーダル」なのである。

しかし、現代において、言葉はその「マルチモーダル」さを失いつつある。前田(2023)は情報社会の発展と共に増加した、人間の心と乖離した虚な言葉を「身ぶりなき言葉」と呼んだ。この「身ぶりなき言葉」とは、それこそ言葉が本来持っているはずの「身体性」を欠いた表面的な言葉であり、深いところでの共感が難しい言葉である。

何かを体験するという事は本来、全感覚的なものである。そしてその全感覚的な体験を「マルチモーダル」な言葉によって認識する。しかし、私たちの言語は少しずつ「身ぶりなき言葉」に侵食され、全感覚的な体験の仕方というものを忘れてしまう。そして限られた感覚によって限定された体験

を認識するのをもまた、「身ぶりなき言葉」である。

子どもは保育現場において様々なことを体験する。そしてその様々な体験を自分の中に落とし込むために、身体性を伴った言葉を使用する。しかしZ世代やα世代と呼ばれる子どもたちがこのような言語活動に触れる機会は減少している。これらの世代の子どもたちは、出生時からスマートフォンやタブレットと共に育ち、「身ぶりなき言葉」にさらされているのである。これらの世代から新たな保育者が生まれることを考えると、保育者が子どもの身体的、創造的な言語活動に出会う機会や、その活動自体を阻害する危険性が懸念される。

この危険性を回避するためには保育者自身が「身ぶりなき言葉」ではなく、身体性を伴った言葉を使用しなければならない。そして、子どもたちがより善い言語活動を行うために、保育者が手助けしていかなければならない。そのためには、保育者自身が感覚を研ぎ澄まし、日頃から身体性を伴った言語活動を行う必要がある。その一助となるよう、保育者養成校の受講科目において身体的な言語活動を展開することが重要である。

2. 2. 保育者養成における絵本を用いた言語教育の重要性

絵本の読み聞かせは、各家庭でもよく行われているが、保育の現場で多く実践される活動である。保育者は子どもに絵を見せながら、様々な声や表情、身ぶりを駆使して子どもに読み聞かせる。その場では、保育者の表情や声色、音の高低などに子どもたちが共鳴したり呼応したり、逆に保育者が子どものそのような反応に呼応するといった身体的なコミュニケーションが行われている。そこには「身ぶりなき言葉」は無い。

絵本の読み聞かせに限らず、保育者は子どもの育ちがより善いものになるため、様々な面で子どもたちを援助し、導く必要がある。子どもと向き合う際に、子どもたちが個々に、どのような状態にあり、どのようなことを考えていて、何を望んでいるのか、また、その状況で援助すべきであるのか、それともあえて何もしない方が良いのか等々、考えることは様々ある。そしてそれらについて考える際、子どもの些細な動作や表情、あるいは目に見えない部分を感じ取り、推しはかることが必要となる。

ここで、子どもがおかれる状況について把握・認識し、そこから予測や想像するために使用するのは言葉である。したがって保育者にとって、言葉の質というのは重要なものであり、何かについて言葉でじっくり考える、あるいは言葉が生まれる場所に立ち返ることがその質を高めることに繋がる。

幼児が言語を獲得する過程では、「それまで名指されないことにより存在しなかった何かを名指し、言葉によって有らしめるという、言葉の生成が行われる。(略)子どもは自身のもつ言葉を使い、言い表せないことを必死に言表しようとするかもしれない。そのとき言表できなかったとしても、そこには言表しようとして指さしている何かが在ることは確かである。その存在や言表しようとする過程に立ちあうこと(前田、2022, p.17)」は、結果として創造的な言語活動をもたらす。これは幼児に限ったことではなく、保育者を目指す学生もこのような創造的言語活動に多く触れるべきである。

以上のことから、本学において絵本を基盤とした言語教育を試みる必要があると考察した。また、絵本には絵や言葉だけではなく、そこで想起される嗅覚や触覚を含む身体感覚的な体験があり、さら

には絵本の読み聞かせを行う際の環境構成や、保育者と園児との関わり方など、保育の5領域全てが関わりあっていることは想像に難くない。これらのことから、絵本を基盤とした学際的な授業を展開することは、保育者養成を行うにあたり有意義なものになると思われる。そこには絵本本来の特性を考慮し、分野横断型というよりは分野融合型の学際性が求められる。したがって、令和6年度より本学にて開講予定の認定絵本士養成講座を皮切りに、絵本を活用した分野融合型の授業展開を検討すべきである。

2. 3. オノマトペにおける音と意味の類似性 ～今後の授業展開に向けて～

大人が幼児と話す際にはよくオノマトペが使用される。また、絵本においてもオノマトペが使用される機会は多い。言語は言葉の音の連なりと、それに対応する意味、そして言葉間の関係性から成る。その対応や関係性は、恣意的なものであって、それゆえ言語は移ろうものである。しかし、オノマトペは言葉の発音や響き自体が質的要素を持ち、ある程度意味を担うため、ある種の一貫性を持つ。このことから、オノマトペは身体性を持つものであり、言語を習得していない状態の幼児にとって、より実感のある切実な言葉として機能する。これが、幼児がオノマトペを好む理由の一つであると思われる。

今井（2023, p.90）は、オノマトペの特徴について「言語の特徴を持ちながら身体につながり、恣意的でありながらもアイコン性を持ち、離散的な性質を持ちながらも連続性を持つ」と述べている。事象は連続的なものであり、それを言語化するということは、言葉によって事象をその連続性から切り離（離散）し、（恣意的に）意味付けることである。しかし、オノマトペはその特徴によって、事象の連続性を損なわずにその事象を言語化する。これによりオノマトペは、他の言語よりも身体性を伴うのである。保育者養成においてオノマトペを使用した授業を展開することは、近い未来に保育者として子どもと関わる人々の言葉の身体性を再興させるために有効であると考えられる。

3. 絵本とは

絵本は「絵と言葉からなる書籍」である。全国学校図書館協議会によって1972年に制定された絵本選定基準の基本原則には「絵本とは、書籍の形態をもって、絵または絵と文の融合から生まれる芸術であると考え」と記されており、絵本が芸術作品として位置付けられていることがわかる。この選定基準には「制作態度」、「絵について」、「文について」、「造本その他について」という大項目があり、これらの大項目が細分化され全体で29項目が選定基準として明示されている。この中のいくつかを抜粋すると、「子どもに対する正しい愛情があるか」、「子どもに興味関心のある題材が選ばれているか」、「子どもの創造力・思考力を伸ばすものであるか」、「既成の概念にとらわれず、創意工夫がなされているか」、「子どもの生活のリズムにあったものであるか」、「芸術的なかおり高いものであるか」、「子どもの感覚にあっており、理解しやすいものであるか」、「わかりやすく、内容を正確に伝えているか」、「文の長さ、リズム、間などについて十分に配慮がなされているか」、「子どもを楽しくすることができるか」等が挙げられている。要するに、絵本とは「子どもの感覚や興味、体験、成長、心により添いながら子どもを楽しませることができる芸術作品」ということになる。しかし、この条件が成立する絵本を見極めることは容易ではない。また、絵本の魅力に

気づくことなく子どもに絵本を差し出す大人も少なくない。現代では子どもを対象とした絵本が多いことは事実ではあるが、大人に好まれる絵本も多い。例えば、安野光雄の『旅の絵本 全10冊』（2022）や谷川俊太郎が画家パウル・クレーの絵に詩を寄せた絵本『クレーの絵本』（1995）、日本人として初めて国際アンデルセン賞を受賞した詩人まど・みちおが自らの絵画作品と詩を組み合わせた『まど・みちお画集 とおいところ』（2003）等が挙げられる。絵本の絵や言葉の力、それらのバランス、絵本の中に湧きあがる音や風景、詩的表現から広がる哲学的な楽しみ方、子どもの心と大人の心の交錯等々、絵本を多角的に捉え、絵本のもつ力と絵本教育の多様性に気づいてこそ、絵本の織りなす世界を価値あるものとして人や社会に繋げていくことができるのではないか。

絵本研究者であり、世界各国の傑作絵本の翻訳を手掛けてきた瀬田貞二の名著『子どもの本評論集 絵本論』（1985）の冒頭は、「ひとの最初にであう本、それが絵本です。」という一文で始められている。この言葉にどのような意味があるのか、子どもと絵本に近い存在である保育者として、また、保育者養成という視座で絵本のもつ力と絵本の存在意義を再考する必要がある。

4. 絵本を選ぶ眼

書店において、絵本は幼児向け絵本、動物絵本、仕掛け絵本、大型絵本など、種類ごとに分けられ陳列されていることが多い。しかし、シリーズや対象年齢等によって分けられているとはいえ、おびただしい数の絵本の中から1冊を選んだとしても、そこには「よい絵本」との出会い生まれにくいことの方が多いのではないだろうか。瀬田貞二（1985）は、こういった仕分けのほとんどが出版社の便宜上の区別であり、自社他社の類似絵本を整理しているにすぎないように思われること、また、シリーズ名は絵本の種類を表しているものではないことを指摘している。瀬田は、小さい読者にとっては、絵本の種類の分類にかかわらず、気に入った絵本がふさわしい絵本であり、子どもの成長の段階にかなった絵本の段階を考えることで、絵本の種類を区切るための必要条件を満たしているという見解を示している。子どもの成長にかなった絵本の種類の区切りとしては、2歳頃の〈ものの認識 ～事物絵本〉から3歳頃の〈文字への興味 ～ABC絵本〉へ、3～4歳頃の〈物語の入口 ～リズム絵本〉から4歳半ば頃の〈物語絵本への準備〉へという段階を追った簡単な図式を紹介し、この段階の先に、無限の空想の世界、長短深淺、感覚的な愉快さから人生の象徴をしめすものにいたるまで物語絵本の世界が開いていくということを述べている。良い絵本の条件について、リリアンH. スミスは、著書『児童文学論』（1964）の中で、「まず第一に、子どもたちの感覚に訴えるが、また知性、情緒にも訴えかける。しかし、子どもの興味をひきつけるためには、その絵本のアイデアや感情は、ただおとなの考えや情緒をただ単純にしたものであってはいけないので、子どもの心のなかにあるそれらでなければならない。」と述べている。よい絵本には、子どもの心を捉える輝きと子どもの世界を広げていく力があるということを両者の言葉からも解くことができる。

絵本の絵と言葉の力については日本の作家による2つの作品から考察する。

『こっちとあっち』（文・谷川俊太郎／絵・樋勝朋巳 2023）は、淡い水色とピンクを基調とした優しいカラーデザインで装幀された絵本である。絵本を構成している文は、主人公の「ぼく」が発する言葉のみで作られていて、見開き2ページの1シーンからなる単色あるいは2色からなる背景に、短く綴られた「ぼく」の言葉が浮かびあがってくる。言葉を話し始め自我が見え隠れする2歳頃の子

どもたちの心にも自然に溶け込んでいく素晴らしい絵本である。主人公「ぼく」（人間）のテーマカラーが水色で、「ともだち」（猫）のテーマカラーがピンクの設定となっており、ページを染める水色とピンクのバランスがシーンの内容によって変化し、「ぼく」の心の状態や「ともだち」との距離を絵の力でも物語るように表現されている。物語の内容は、孤独な「ぼく」が「ともだち」と出会うことで、自らの心の扉をあけて友達の世界を理解しようとするシンプルなものである。全24ページ（12シーン）に綴られている「ぼく」の言葉は、以下の詩的な12のフレーズで構成されている。

- ・ぼくはむかしからこっちにいます
- ・こっちがすきだから
- ・あっちからともだちがあそびにきました
- ・あそんでいたらけんかになった
- ・ともだちはあっちへ行ってしまった
- ・ともだちがまたくるまでぼくはえをかく
- ・えをかいていたらともだちがかえってきました
- ・めずらしくおみやげをくれました
- ・けんかしてないときはともだちとあそびます
- ・またともだちとけんかになった
- ・こんどはぼくがあっちへいきます
- ・ぼくはあっちもすきになりました

「喧嘩」を題材にして綴られている平易な言葉は、柔らかな線で描かれた登場人物の繊細でユーモアのある表情や淡い色彩を纏うことで、幼い子どもたちの感覚を通して自然に身体に入り込み、心を動かす。しかし、それだけではない。詩人：谷川俊太郎と画家：樋勝朋巳の織りなす言葉と絵の力によって、絵本の中の「ぼく」と「ともだち」の存在は、私たち読み手に、自他の存在・幸せとは・寛容・共存・思いやり・愛について思考することの楽しさを示唆する。タイトルの「こっとあっち」という言葉からは、「安心できる世界」と「未知の世界」、「あなたに来て欲しい場所」と「あなたに会える場所」、「自分の時間」と「あなたの時間」、「ゆるしたくないこと」と「ゆるせそうなこと」等、言葉と言葉の狭間で思いを巡らせることができる。幼児期の子どもたちに楽しみをもたらす絵本は、私たち大人にも感覚的、思想的な戯れの時間を与えてくれる。ここに絵と言葉の融合性・芸術性がもたらす絵本の無限の可能性を証明するものがあるといっても過言ではない。

『あーといってよ あー』（文・小野寺悦子／絵・堀川理万子 2015）という絵本は声（音）を題材にして描かれている。絵本に登場する1人の男の子が、読み手にさまざまなシーンで「あーといってみて」と語りかけてくる。絵本の男の子の身体から発せられる、本来は見えない「あー」という声（音）は、絵の力によって、質感、重さ、透明感、色彩感、律動、躍動感、方向性をもった目に見えるものとなる。読み手は、物語の中の様々な場面で、絵本の「男の子」に誘われて同じように「あー」という声を出していくことで、変化する自分の声を体感し、表現することの面白さに気づいていく。湿った空気の中で水平に響く渡る声、うがいをするように上をむいて出されるガラガラの声、地面に響くように発せられる重たい声など、声は絵の力をかりて、飛んだり、のびたり、長くなったり、びりびりしたり、変幻自在に現れる。絵本の終盤に向かっては、驚きや喜びの感情の

「あー」や世界中の人と一緒に声を出す「あー」、ありさんの内緒話の「あー」にもなり、最後は、読み手の心が込められた「いちばんいいこえの あー」に至って絵本は「おしまい」となる。この作品にも、絵本という土壌が生む学びの融合性、絵本の学際性を説く糸口がある。絵本で発せられる言葉はたった一語、母音の「あ」のみである。『大辞林』には、「①五十音図ア行第一段の仮名。後舌の広母音。②平仮名「あ」は「安」の草体。片仮名「ア」は「阿」の行書体の偏。」と記されているが、絵本の中の「あ」は、感情を含んだ感動詞としても表現され、また、音響学的に音（声）としても表現されている。「あ」は後舌の広母音であるため、舌の位置や唇の形に干渉されにくい。また、他の4つの母音に比べて響きやすい特徴を持った言葉である。これらのことから、発音時に豊かに変化させることができる「あ」という母音が選ばれ、絵本の中でさまざまな形に表現されていると予想できる。美しい日本語を発音する際には母音を意識し響かせるという感覚が重要となるが、幼児期に、発音しやすく響きやすい「あ」という言葉に着目し、母音を感じ、聴き、発する体験は、言葉に対する関心を育てることや日本語の根源的な理解に繋がっていくと考えられる。また、この絵本の前半では、「あー」という言葉が「身体から出す音」として表現されているページが複数みられる。見えない音を見えるものとしてイメージすることは音楽表現の視点からも重要であり、大抵の場合、出したい音のイメージ（動き、方向性、密度、重さ等）とその音を出す身体の状態や使い方は一致している。使う楽器の種類によって身体の使い方が変わってくることは言うまでもないが、様々な楽器を演奏する場合、または楽器を使わない場合も、音を出す行為では呼吸（身体）を意識することが基本となる。呼吸に直結している「歌うこと」や「様々な声を発声するイメージを持つこと」は音楽表現の基盤となるのだ。しかし、表現したい音のイメージを相手に伝えようとする場面では、伝える側の個人的な感覚や表現手段に左右され、受け取る側との双方の共有ができないまま、曖昧な伝達状況に陥ってしまうことの方が多いのではないだろうか。ところが不思議なことに、この絵本のたった数ページによって、容易ではないはずの音のイメージの伝達や双方間での共有が、それこそ「あっ」という間に成就されてしまう。絵本のテーマである声（音）は、絵の力と融合し、質感、重さ、透明感、色彩感、律動、躍動感、方向性、感情を持った目に見える音として読み手に認識され、身体を通じた実際の声（音）として絵本と現実の世界を行き来している。このように対話する力を持った生きた言葉は、子どもたちに貴重な体験として残っていく。語り尽くせない魅力を持った絵本は世界中に数多く存在している。私たち大人が、それらの絵本が発する力に気付くことが出来るように絵本を選ぶ眼を持つこと、それが、幼児期にどのような絵本と出会うかという重要な機会を奪ってしまわないために必要なのである。

5. 保育現場での絵本との関わり

保育の場において絵本は、幼児の言葉に対する感覚や想像力を育むうえで重要な教材として位置付けられ、日頃から保育者による絵本の読み聞かせが頻繁に行われている。幼稚園教育要領解説（2018）における領域「言葉」では、「幼児が絵本を見たり、物語を聞いたりして楽しみ、言葉の楽しさや美しさに気付いたり、想像上の世界や未知の世界に出会い、様々な思いを巡らし、その思いなどを教師や友達と共有したりすることが大切である」と、言葉に対する感覚や想像力だけでなく、幼児が絵本を通して様々な思いを巡らせることや、思いを他者と共有することにも言及されている。ま

た、保育者が絵本を子ども達へ読む際には、「幼児なりの感じ方や楽しみ方を大切に」することや、「題材や幼児の理解力などに配慮して絵本を選択し、幼児の多様な興味や関心に応じること」、「落ち着いた雰囲気をつくり、一人一人が絵本や物語の世界に浸り込めるようにすること」などに配慮するよう示されている。

子どもが園で絵本に触れるとき、一人で絵本を読んで楽しむこともあれば、友達と一緒に絵本を楽しむこともある。だが、集団生活の中で絵本に触れる、楽しむ、ということを考えたときに、どちらかというと保育者が子ども達に絵本を読む、提供するという場面が多いと考えられる。長瀬ら（2003）の調査でも、園での読み聞かせの形態はクラス全体で行うことがほとんどであると示されている。クラス全体で絵本を読むことの意義として波木井（1994）は、「読み手と聞き手、また聞き手同士と一緒に本と出会い、その作品世界を共有し、心を響き合わせること」だと述べている。保育者や友達と一緒に絵本を読み合うことで気持ちや行動が共有され、クラスでの一体感につながるのではないかと考える。

また、保育者による絵本の読み聞かせは「降園前」に行われることが多く、次いで「活動、保育の導入」や「活動の切り替え」などの際に行われていることが示されている（長瀬ら，2003）。ある程度ねらいや目的が明確な「活動、保育の導入」や「活動の切り替え」における絵本の読み聞かせに比べ、「降園前」の絵本の読み聞かせは、保育者が自由に絵本を選択できる場面であると考えられる。様々な保育場面に応じて保育者がどのような絵本を選び子ども達へ読むのか、どのように提供するのか、といったことは、子どもの絵本との出会いや絵本体験に深くかかわる重要な点である。橋村（2018）は、保育者を目指す学生が絵本を選択する際、自分の好きな絵本や過去に読んでもらったという経験知から選書していることを指摘している。幼児期に園で出会う絵本が、長い年月を経ても記憶に残っていくということが容易に想像できる。数多く出版され続けている絵本の中から保育者が絵本を選ぶ際、どのような視点で絵本を選択していけばよいのだろうか。

保育学生の絵本の選び方として八木（2018）は、絵本の絵や文章に着目する学生が多く、「かわいい」「かわいらしい」等というように直感的・情緒的に絵本を選択していることを示している。子どもの姿を想定するというよりは、絵本の見え方や自分の好みなど、表面的な理由で絵本を選択している傾向があると考えられる。

一方で、保育者の絵本選択について佐藤ら（2007）は、保育経験年数を積んだ保育者ほど、幼児のその時の姿だけでなく、保育内容を高めようとする思いが見られることや、自らが願う幼児の姿を描きながら絵本を選択することを明らかにしている。また、横山・水野（2008）は、10年以上の保育者へのインタビュー調査により、保育者が「子どもの生活・興味」「季節感」「行事」と関連した絵本を選択していることを示している。さらに並木（2014）は、保育者が比較的自由に選書を行う場面での絵本の読み聞かせには、担任と幼児との信頼関係の構築や、幼稚園生活の安定、絵本への興味の向上を図りクラスの友達と読み合う楽しさの積み重ね、という意図で絵本が選書されていることを明らかにしている。これらの先行研究から、保育者はその時の子どもの実態はもちろんのこと、絵本をとおした園生活や友達、保育者とのつながり、保育内容の発展などを考慮して絵本の選書を行っていることがうかがえる。保育者として保育現場に出ることによって日々子ども達と接し、子どもの育てほしい姿やそれに向けた保育内容を展開していくことで、より子どもの実態に即した絵本選びがな

されているのではないかと考えられる。また、保育者との信頼関係を深めるために自分の好みの絵本を子ども達へ読む（並木，2014）場合や、読んでみてよかったと思う絵本を選ぶ場合もちろんあるだろう。このようなことから、保育者自身がこれまでにどんな絵本に触れ、どれだけ絵本に触れてきたかという経験は、子どもと絵本とを繋ぐ者として重要であると考えられる。

6. おわりに

幼児期によい絵本に出会うということは、子どもに安心感を与えると同時に、世界を広げ、力のある言葉や心を動かす絵に共鳴する感性を涵養する。保育者には、よい絵本と子どもを繋ぐという重要な役割があり、そのため、よい絵本との出会いを重ねていくことは保育者を目指す学生にとっても必要な体験と言える。保育者が絵本と子どもを繋ぐ時、そこにはその絵本を手にする理由が必要である。物語の展開に心を動かされる、登場人物の言葉や表情が好きである、場面の風景に惹かれる、他国の文化や雰囲気に興味をそそられる等、その理由に気づき共感する力は読み手の感性であり、そしてそれは次第に探究心にもなっていくだろう。絵本の世界では、言葉を認識する過程に起こりうる曖昧な印象に、絵によって現された視覚的な要素が融合されることで作品に近づく扉が開かれる。この扉を1つのきっかけとし、絵本の世界を身体的、創造的な言語活動として体験していくことは、言葉を、単に情報を伝達するための道具として使うのではなく、言葉ひとつひとつの重みを感じ、考える力を養うための下地となっていく。それは、幼児期の子どもにだけでなく保育者を目指す学生にとっても重要な経験である。

絵本による教育はまさに人間性を育てていくための豊かな土壌をつくることであり、その土壌によって育てられた学生たちの可能性は、将来、保育者として出会う子どもたちの生長を促し支える力になると確信している。

【引用・参考文献】

- ・安野光雄（2022）『旅の絵本 全10冊』 福音館書店
- ・今井むつみ（2010）『ことばと思考』 岩波書店
- ・今井むつみ・秋田喜美（2023）『言語の本質』 中央公論新社
- ・絵本専門士委員会 独立行政法人国立青少年教育振興機構（2022）『認定絵本土養成講座 テキスト』 中央法規出版株式会社
- ・小野寺悦子 文、堀川理万子 絵（2015）『あーと いってよ あー』 福音館書店
- ・白川 静（2005）『新訂 字訓』 平凡社
- ・瀬田貞二（1980）『幼い子の文学』 中央新書
- ・瀬田貞二（1985）『子どもの本評論集 絵本論』 福音館書店
- ・谷川俊太郎 文、パウル・クレー 絵（2015）『クレーの絵本』 講談社
- ・谷川俊太郎 文、樋勝朋巳 絵（2023）『こっちとあっち』 クレヨンハウス
- ・波木井やよい（1994）『読み聞かせのすすめ 子どもと本の出会いのため』 株式会社国土社
- ・まど・みちお（2003）『まど・みちお画集 とおいところ』 講談社
- ・リリアン H. スミス著、石井桃子 瀬田貞二 渡辺茂男訳（1964）『児童文学論』 岩波書店

- ・『大辞林 第四版』（2019）三省堂
- ・佐藤智恵・松井剛太・上村眞生・祝小力・趙京玉（2007）保育者の絵本選択の理由と経験年数との関連に関する研究. 幼年教育研究年報第29巻, 59-64.
- ・全国学校図書館協議会（1972制定）全国学校図書館協議会絵本選定基準
- ・長瀬荘一・幸本由紀子・富本佳郎（2003）幼稚園における絵本の語り読みの実態. 神戸女子短期大学紀要論攷, 48, 123-137.
- ・並木真理子（2014）幼稚園入園年齢4歳児への読み聞かせにおける絵本の選書理由および保育者の読み聞かせスタイルの検討-「降園前」の読み聞かせ場面に着目して-. チャイルド・サイエンス VOL.10,66-70.
- ・橋村晴美（2018）領域「言葉」における言葉の感覚が養われる教育方法についての一考察-学生の絵本の選書から見てきたもの-. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究第3巻第2号, 19-28.
- ・前田一明（2022）幼児期における音楽と言葉の原体験についての考察. 青森中央短期大学 研究紀要第35号, 15-19.
- ・前田一明（2023）原初の言葉が生まれる場所～幼児教育における言葉の重要性～. 青森中央短期大学研究紀要第36号, 35-39.
- ・文部科学省 子どもの読書活動の推進に関する法律（平成13年法律第154号）
- ・文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説. フレーベル館.
- ・文部科学省（2023）第五次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」
- ・八木義仁（2018）「保育内容の研究（言葉）」における読み聞かせの選書理由の傾向. 畿央大学紀要第15巻1号, 5-10.
- ・横山真貴子・水野千具沙（2008）保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義-5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から-. 教育実践総合センター研究紀要第17号, 41-51.